

---

# オレア達の挑戦

北加チヤ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

オレア達の挑戦

### 【Nコード】

N9132C

### 【作者名】

北加チヤ

### 【あらすじ】

平均年齢76歳の老人7人。のんびりと毎日を送っていたある日、仲間の一人の提案からとんでもない挑戦をすることに！？ハートフルコメディ。この作品は仙台弁で書かれています。

(前書き)

この作品は『方言企画』参加作品です。分かりにくい方言についてはあとがきに訳をつけています。「方言」で検索しますと他の作者さんの作品もご覧になれます。

『みちのくよさこい祭り』さ出ようと言い出したのは、正吉つあんだった。

いつものようにマレットをした後、竹次郎さん家で茶飲みして日時だ。いつも無口な正吉つあんが、突然こう言った。

「今度の、よさこいさ、オレア達で出場すねえが？」

「んなああ?!」

その場にいた正吉つあんを除く6人が驚いたのは言うまでもねえな。オレもお茶つこば噴出しそうになった。正直、一瞬正吉つあんぼれだんでねえが(1)と思った程だ。んだども、まんず(2)そんぐれえ信じらんねえような話だべや? 『みちのくよさこい祭り』つーのは、しゃもじみてえな楽器持って踊る祭りだ。踊りっこ踊んだど? オレア達年つしよりでなくて、若けえ人らの祭りだべや。

そいづも正吉つあん、オレらの中で一番の年長だ。今年で89だどわ。もう90になるずんつあん(3)が踊れるはずがねえ。正気だねえと思わつても、しゃあねえと思う(4)。

まんず、仙台さ祭り見に行くだけでもおどけねえのに(5)踊るなんて無理に決まつてる。オレはそいなく思った。

「なーぬ言つてんだか。正吉つあん、踊れんのが? そげなへつぴり腰で踊れるわけねえべや。笑いもんになんのが関の山だど」

そう言ったのは勝夫さんだった。勝夫さんはオレア達の中で一番若い。今年で68歳だ。

「よさこいつーのは、若けえ人らの祭りだいつちゃ。オレア達みてえな年つしよりが出るもんでねえべ」

目立ちたがりの権太郎さんも反対みてえだ。

ま、こいな反応返ってきててもしやあねえな。

オレはその時、この話はここで終いだと思った。ところが、

「いんでねえが。やってみっぺ」

と龍郎たつろうさんが言ったんで、事態は大きく変わることになった。

「オレも最近暇してだしよ、何か変わった事やってみでえど思ってたんだわ。踊りっこ踊るぐれえ、ちよつと練習すればできっぺ？

オレア、やってみてえ」

龍郎さんは前に町内会長もやっていたオレア達の『りいだあ』だ。権太郎さんと勝夫さんなんかは龍郎さんの舎弟っこみてえなもんだから、この人が「白だ」と言ったら黒いカラスも白になる。

「龍郎さんが、そいなく言うなら……」

「んだなあ……」

んだから、笑い飛ばされるだけだと思つた正吉つあんの提案は、『まさか』が起きて現実になった。

平均年齢76歳、全員の年齢を合わせつど460歳になる『みち

のくよさこい祭り』最年長チーム、『カンオケポツクリズ』はこうして生まれた。

ん？ 名前か？ オレア達みんな片足棺桶さ突っ込んでるようなもんだべ？ んだから、洒落つけきかせてこいなく付けたんだ。どうだ？ 良い名前だべ？

\*

踊りの練習は想像していたよりも、ずっとしんどかった。日本舞踊の先生している松田さん所の嫁さんが『ぼらんであ』で踊りの指導してけることになったんだども、まんず『りずむ』が合わねえ。周平さんなんかは耳聞こえねえから、みんなの動き見て合わせてんだ。んだから、一人ずつどみんなずれちまう。

こいづは踊りでねえな。若けえ人見たら、年っしよりみんなたかつたんでねえか（6）と思うがもしんねなあ。ともかく、オレア達の踊りはひでえもんだった。

「やっぱ、無理でねえのか？ 残り1ヶ月しかねえんだど？ こいなんでは、とてもじゃねえけど人様さ見せられるようにはなんねえべ」

オレははじめから消極的だった。んだから、こんなことを龍郎さんにもらしたんだ。ほしたら、龍郎さんはなじよなこったか（7）

大笑いしてオレの肩をぽんと叩いた。

「んなあ、はじめっから分かってっぺや。オレア達がまともな踊りっこ踊れるはずがねえべ。」

「んだからな、こいづは参加すっことに意味があんだ」

そいなく言うと、龍郎さんはもう一度オレの肩を叩いた。龍郎さんは体格良いから、力あっぺや。ちよつと小突いただけなんだども、オレは前のめりになっちまった。

「んだども、龍郎さん。わざわざ笑われに行くようなもんだいっぢや。子供だら、下手くそでもめんこいけども、年っしよりでは引っ込めど言われんでねえか？ 物っこ飛んでくっかもしゃーねえど」

オレだら、年っしよりの下手な踊りみるよりはめんこい子供か、若いねえちゃんの前で踊りっこ見る方がいい。たぶん、こいなく思っつんのはオレだけでねえはずだ。竹次郎さんも同じようなことを言っつた。さすがに龍郎さんの前では言えねえけども、勝夫さんと権太郎さんも同じく思っつてるみてえだった。

「そいでもな……」

龍郎さんは急に真面目な顔になった。

「藤吉つあん、オレアな、正吉つあんのためにみんな出てえんだ」

「正吉つあんのため？」

「そいづは、どついう意味だ……？」

「正吉つあん、仙台の息子と暮らすことにしたんだと」

「え……?」

初耳だった。

「去年、正吉つあんの奥さんが病氣したべ？ あいつてな、奥さんすっかり氣い弱くなつまつたんだと。それにまた何か有つた時困つぺ？ オレらん年ではいつ何が起きつか分かんねえべや。家族と暮らせば安心だべ。正吉つあん、ここ離れたぐねって言つてたども、仙台さ行けば毎日孫さ会えつからな。もつと早えくからそいなぐすれば良かったつて言つてた……」

「……そいでは、正吉つあんがよさこいさ出てえつたのは、思い出作りのためが？」

「んだな。そいづもあつぺな……」

正吉つあんは、いつもにへらにへらつてで（8）オレには悩み事ねえように見えてた。んでも、そいづは間違いだつた。大体、悩みねえ人間なんていねえべや。オレでも10代の時には10代の、30代の時には30代の悩みがあつた。今でも……

若けえ人らには年つしよりはただのんびりと毎日を過ごしてるように見えつぺが、人それぞれ悩みを抱えてんだ。んでも、若けえ人と違ってオレア達はそいづを解決すつことを諦めちまつてんだ。我慢すつこどや、折り合いつけて行く事に慣れちまつてんだ。オレもそうだな。もつとわがまま言いてえと思つても、つい遠慮しちまつ。そいづは家族に対してもだ。いや、家族だからがもしんねえけどな。

\*

そいな話を龍郎さんに聞いてから、オレは前より踊りに身入れるようになった。年取ったら笑われんのはしゃあねえこつだ。そいつても、そいづを恐れでたら何ぬもできね。どうせ笑われんなら、大勢の前でもいっきし笑われてみつか。ほいで、そいづを笑い話の一つにすんのも良いがもしんねえ。

オレがそいな風に吹っ切れた時だった。思いがけないことが起きた。

あいつた……ほれ、8チャンネル。『H！バンドス』っつー番組あつぺや。あいつちやオレア達が出つこどになつたんだ。

TVの取材はみんなはじめてでな、オレも緊張すつまつてあつぺとつぺな（9）事言つちまつたんだ。権太郎さんの奥さんなんかあのとおりだべ？ あつという間にオレア達の事は町中の噂になつちまつたんだ。ほしてなしてか、一部の年つしより連中からは英雄扱いだ。

んでも、ま、口悪く言う人達もいだよ。踊れもすねのに、ただ目立ちたいだけでねえのがつて。腹がたつた。何もしやねえで、口ばつか立つ連中をぎやふんつー言わしてえ。血の気多い勝夫さんに火がついたんだな。ほしたら、みんないきなしやる気出てきてな。竹次郎さんも、修平さんも、みんなの見てない所で自主練すすれんしてたらしいど。

みんな気合入ってるもんだから、踊りの先生もえらいびっくらすてたな。

一ヶ月はあつという間だった。毎日の練習もむなしぐ、オレア達の踊りははっぱ(10)上達すねがった。どんなに先生がまでに(11)教えてけても、生徒が駄目ではしゃねっちゃ。

10月の某日。オレア達は『みちのくよさこい祭り』の会場さ、朝早くから汽車(12)で行ったんだ。皆緊張してっぺ？ そいでいつも車かバスで歩いてっぺや。久しぶりに汽車さ乗るもんだから正吉つあんなんか、わらわら(13)乗つとこして、危うく線路さ落ちつどこした。ほれ、3番線は少しばつか隙間が広くなつてっぺや。あいづ危ねえよな。竹次郎さんはボタン押さねで、開かねって騒ぐし、その日は始まる前からみんな興奮してたんだ。オレもよげ(14)すねように気を付けねえどと思って、気付いたら弁当は家さ忘<sup>わしえ</sup>てきてしまつたんだ。

「龍郎さん、こいづどつち前だべ？」

「なんだべ、周平さん。そいづ<sup>つしよまえ</sup>後前だべ」

オレア達の衣装を作つてけたのは、勝夫さん所の嫁さんだ。あの人はえらい手エ利く(15)んだ。

「んー。こいなハイカラな服着んの初めてだから、いずい(16)なや」

「こいなびらびらつっいの着てたら、チンドン屋と間違われんでねーが？」

馬子にも衣装でねえな。ずずにも衣装か？ もぞい(17)ず

んつあん連中でも、こいなく着飾ればそれなりに見える。んでもま、隣にいる『ぷりんと富谷』っつー若い娘っこ達には負けっけどもな。

演目は順調に進んでいった。オレア達の出番は5番目だから、すぐによつてきた。年っしより待たせつど疲れつと思つたんだべな。実行委員の人らはみんな親切で、オレア達が不自由しねえように色々世話してけだ。こいな事があつど、今時の若けえ人らも悪くねえと思うな。仙台駅に降りた時、地べたに座つてる野郎っこ見た時にはがっかりしたけつども、みながみんな常識がねえわけではねえよな。

「それでは、『カンオケポツクリズ』の皆さん、スタンバイお願いします」

ほして、ついにこの時が来たんだ。

オレア達の踊りは本当にひどいもんだつた。皆ふらふらつて足元おぼつかねえし、音楽と踊りも合つてねえ。んでも不思議と、お客さんは笑つてねがつたんだ。皆あ真剣にオレア達の踊りば見てだ。権太郎さんが鳴子落としても、周平さんが振り付け間違えても、オレア達が一生懸命やつてるもんだから、お客さんは黙つて見ていたんだ。

んだから、出場すつ事に意味があるつつた龍郎さんの言葉の意味ば、オレはこん時に知つた。

思い出作りだけでなく、オレア達がこんなに頑張れるってことを皆にみせねばなんね。

ただのぼけらつとした年っしよりではねってことを、みんなに教えてやんねば……

オレア達は無我夢中で踊った。よげなことは考えねえで。ただ、踊った。

ほいなくしてるうちに、だんだんと体と音楽が混ざり合って、全然合ってねがった皆の踊りが一つになっていくのを感じたんだ。

本当に、楽しかったなあ。このままぽっくり逝っても良いと思うほど、こん時のオレは充実<sup>すいじつ</sup>していた。はじめはやる気なんかねがったのに、よさこいさ出て良がったなと思った。みんなと踊れて良かったと思っただや。

ところが最後、一回転して終了っつー所で事件が起きた。

突然お客さんから「わー」っつー声が上がったんだ。なじよしたと思って、後ろ振り返ったら、竹次郎さんが倒れていた。苦しそうに顔を歪めて、左手え腰さあてている。

オレにはすぐに何が起きたか分かった。

竹次郎さん、ぎっくり腰になったと……

\*

その後、救急車呼んだりなんだりかんだりって（ 18 ）えらい

大騒ぎになつてしまった。ほいなこつだから、オレア達は意気消沈してしまつた。とんでもねえよげすてしまつたど。

笑われんならまだいい。こんな事で迷惑かけんたら、参加しねほが良かったべや。そいな呟きが聞こえて来た。オレも年つしよりがおだつたから（ 19 ）バチが当たつたんだと思つた。こいな祭りさ年つしよりが出るべきではねがつたんだと……

「みんな、すまねな。オレがしゃしゃつて（ 20 ）よさこいさ出るつつつたばりに、こいな事さなつて……竹次郎さんは本当に申し訳ねえ」

正吉つあんが一番落ち込んでいた。この人は気に病む性分だから、必要以上に思いつめてしまつたんだ。オレア達が励まして、俯いたまましよげかえつていた。

「正吉つあん……」

こん時のオレは何て言えばいいのか分かんなくて、声をかけられねがつただや。

……このままでは今までやってきたことが無駄になつちまう。んでもなんつえばいいんだ？

何言つても、もう……

そんな時だつた。

「そんなことないよ、おじいちゃん達かっこよかつたよ」

若い娘つこの声がして、オレ達は一齐にそちらを向いた。

「一生懸命踊つてて、すごいなつて思つたもん」

オレア達の前に踊った『プリント富谷』の若い娘さん達だった。娘さん達は、しょんぼりしている俺達を励まそうと色々言葉をくれた。

かつこよかっただの、まじすげえだの、やばいだの、若けえ子の言葉はよく分かんねがったけども、あつたけえ気持ち伝わってきた。オレは嬉しくなった。

「一緒に、写メ取ってください」

「あー、私も〜！」

「みんなで撮ろうよ〜」

そいなくしてるうちに、いぎなし騒がしくなった。写メっつーのは写真撮るみてえなんだが、今時の携帯電話はすげえのな。こんなちっさこいのにちゃん綺麗に写るんだから。

ほして娘っこ達はどやどやってど、オレア達を囲みこんで各々ポーズをとった。オレア達はその迫力に負けて、わけも分からずポーズばとつたんだ。龍郎さんなんか女好きだから、若い子に囲まっつうれしそうに鼻の下のばしてた。オレもなんだか照れくさくなった。顔が赤くなっただがもしんね。

ほしてたら、

「じーさん、何してるんだよ」

といきなし言われて、俺はたまげた。

「隆！ おめえ、なじよした?!」

んだってよお、オレの孫の隆が険しい顔してそこさ立っていたんだど？ 驚くべや。

「弁当、持ってきたんだけど。忘れてっただろ？」

「んだども、おめえ……今日、デートでねがったのが？」

オレがそいなく言つと、隆はぷいと横を向いて言った。ああ、機嫌が悪いな。

「そつだよ。待たしてる。だからすぐ行く」

「そつが。ありがとう」

隆さも迷惑かけちまったなあ。オレがそいなく思つてつと、突然隆が思いも寄らないことを言った。

「……良かったよ。じーさん、元気そつで」

「……？」

「なんか騒ぎになつてたから、何かあつたのかと思つた」

つまり隆は竹次郎さんが救急車で運ばれたのを、オレではねえのかと心配になつて見に来てくれたということだ。ほいなもんだからオレが元気なのを見て安心したのか、隆の表情は柔かぐなつた。

「今日オレデートだから、疲れたから帰り車で送つてくれつつつても無理だから。電車で帰んの、気をつけるよ。じーさん足遅えから、車に轢かれんでねーぞ」

そいな事を言い残して、隆は去っていった。オレの手には隆から渡された弁当の入った袋。

「隆……」

いつもこいなずんつあんさかまつてらんねえって言ってる孫が、思いもよらず優しい言葉を言うもんだから、俺はつい泣きそうになつまつた。馬鹿みてえだべ？ んでもなあ。まんず、年とつど涙もろくてしゃあねつちや……

隆から渡された紙袋を開けると、息子の嫁さんが作ってくれた弁当の他に、饅頭がひとつ入っていた。

そいづは俺の好きなずんだ饅頭。隆はちゃんとそいづを憶えていたんだな。

\*

そいなくしてオレア達の挑戦は終わったんだけども、その後信じられないような事が起きたんだと！

こいづは奇跡としか言い様がねえな。神様が冥土の土産にくれた贈り物、若けえ人らがオレア達にくれた『ふれぜんと』だ。

なんと、オレア達『カンオケポックリス』がよさこい実行委員会特別賞を貰ったんだ。信じらんねえべ？ まんずな、賞だら若けえ人らさやればいいのによ。こいな年つしよりさやんねでもいいのに

なあ。

よさこいが終わって、オレア達はまた今までと同じ生活に戻っていった。毎日のんびりとして、時々マレットするぐれえの日々。

んでもその中に正吉つあん姿はねえ。仙台の息子さんの家に移った正吉つあんのもの住まいは、今は売家になっている。正吉つあんはどうしてっかって？ 時々電話でしゃべっけども、うまくやっっているみてえだど。元気そうだ。

竹次郎さんのギツクリ腰はどういなくなっただかと言うと、特に問題もなく、あれから数日安静にしているだけで済んだ。あの人は丈夫だから、家族は皆心配はしてねえみてえだったな。本人も笑い話が出来たって言ってたし、まんず元気だ。

あの後よさこい実行委員さんから「また来年も出場して下さいね」と言われたんだが、オレア達にその気はない。オレを含め、仲間の多くが医者から止めらったんだ。『どくたあすとつぶ』ってやつだな。踊りすんのはいいが、あいなく舞台の上でやんのは良くねえんだと。まあ、しゃあねっちゃ。いろんな所さガタ来てる年っしよりだ。今年踊れたのが奇跡なんだわ。

よさこい終わった後、オレなんかえらいこわくてひしゃましたど（21）。周平さんもそうだったど。

「みんなあ、聞いたかあ？」

ある天気の良い日。マレットをしながら、権太郎さんが言った。なんだかいつもと様子が違う。ちよつとばりだども、興奮しているようだった。

「今度、おらほさ』のど自慢』来るらしいぞ」

「ぬ!？」

「本当か？ オレア、見にいきてえな」

「あいづ、金かかんだべか？ オレも見てえな。どこでやんだべ？  
公民館か？」

「公民館ではせまつこいべや。文化センターでねえのか」

オレはあの番組は毎週かかさず見ている。若けえ人らの音楽番組は分かんねえ人ばり出てつまんねんだども、あいづはおもしれんだ。

「そいづなんだがよお、どうだべ？ オレらで』のど自慢』さ出て  
みねえか？」

「なす?!」

オレア達は驚いた。のど自慢つーのは歌の上手な人達の出る番組だど？ そいっちゃ出るって言うには……

んだども、権太郎さんは目を輝かせてこう続けた。

「あいづ、名前なんつったけかや。んだ。そう、』しすへ あず  
つていっぺや。あいづやりてえんだ」

「しす……?」

その歌手のことを後で孫に聞いたら馬鹿にさった。

そいなやり取りがあつて、オレア達『カンオケポックリス』は『  
のど自慢』でまた新たな伝説ば作ることになんだけつども、そいづ  
はまた今度話すべな……

まあ、オレア達の挑戦は本当にみんながぼつくり逝くまで続くつ  
つーことだ。

ははは。まだまだ長生きすつど。皆、覚悟しておけー。

END

(後書き)

【方言訳】

- 1 「ぼれだんでねえが」 「ボケたのではないか」
- 2 「まんず」 「まあ」 「なんとも」
- 3 「ずんつあん」 「じいさん」
- 4 「しゃあねえど思う」 「仕方がないと思う」
- 5 「おどけでねえのに」 「大変なのに」
- 6 「たかつたんでねえか」 「頭がおかしくなったのではないか」
- 7 「なじよなこつたか」 「どういうことが」
- 8 「にへらにへらつてで」 「(馬鹿みたいに) にこにこしていで」
- 9 「あつぺとつぺな」 「あべこべな」
- 10 「はつぱ」 「さつぱり」 「ちつとも」
- 11 「までに」 「丁寧に」
- 12 「汽車」 「この場合は東北本線です。」
- 13 「わらわら」 「急いで(あわてて)」
- 14 「よげ」 「余計なこと」
- 15 「手エ利く」 「手が器用だ」
- 16 「いずい」 「心地悪い」
- 17 「もぞい」 「しょうもない」
- 18 「なんだりかんだりつて」 「何だかんだと」
- 19 「おだつたから」 「調子に乗ったから」
- 20 「しゃしゃつて」 「いい気になって」
- 21 「えらいこわくてひしゃましたど」 「とても疲れて大変だった」

方言だらけで、ちゃんと読めましたでしょうか？仙台弁に詳しい方で変なところがありましたら指摘お願いします。12はもしかしたら私の故郷だけかもしれませんが、東北本線は昔汽車が走っていたのでうちの方の年配の方は、仙石線は電車、東北本線は汽車と呼び分けたりしています。19の「おだつ」と20の「しゃしゃる」は大体同じような意味です。

物語の中に『みちのくよさこい祭り』が出てきましたが、よさこいは宮城では始まったばかりの新しい祭りです。もちろん『カンオケポックリズ』は架空の団体名なので存在しません。

マレットはマレットゴルフのことです。ルールはよく知りませんが、私の祖父がやってます。

ずいぶんとローカルな内容になってしまいました。何か感じていただければ幸いです。感想お待ちしています。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9132c/>

---

オレア達の挑戦

2008年8月29日19時34分発行